

## 新春法話「多様性の世で生きる」

明けましておめでとうございます。

令和になって初めての新年を迎えました。昨年は数度と台風や豪雨の災害に見舞われ改めて自然の脅威を感じる年となりましたが、今年は先ずもって風雨順次であることを切に願うところであります。

さて、今年七月二十四日から八月九日まで東京オリンピックが、八月二十五日から九月六日まで東京パラリンピックが開催されます。昭和三十九年の開催時には九十四の国と地域の人々が平和の祭典に集いましたが、今回は二百を超える数となり、ますます多くの人々が集うこととなります。昨年の世界ラグビー大会でも世界から多くの人々が日本に来ました。そして、私たちはラグビーを通じて世界の国々の多様な文化、風習、考え方を知る機会となり、外国の方々には日本の文化、風習にふれあうことで日本に日本人に良き印象をもたれたようでした。

かつてなく多様な社会になろうとしている日本。私たちは今まで以上に多様性の尊重を求められていくことになります。「多様性」とは何か。様々に異なることの違いを認めることで、反対語としては、同じであることを求める「単一性」があります。ただし、単一性を強く求めるとかえって偏見や差別を生むこととなり、人類の歴史において大きな過ちを犯したことを決して忘れてはいけないことです。

違いを認めること、奈良の大仏の建立の思想の拠り所となる華嚴経というお経の中に「一すなわち多 多すなわち一」という教えがあります。一つの中に多くがあり、多くの中に一つがある。わかりやすく例えれば、おでんを想像してください。大根、こんにゃく、がんもどき、はんぺん、牛すじなどの一つ一つの具材がだして煮込まれて美味しい「おでん(多)」となります。おでんの中には種々の具材があり、具材がなければおでんは成り立たず、おでんがなければ具材は活きない。このような関係は私たちの社会においてもいえることなのです。

ところで仏様の世界を表したものに「曼荼羅(まんだら)」があります。そこには千八百体を超える仏様と仏教の守護神だけでなく、異教の神々も秩序よく描かれています。曼荼羅は私たちあらゆるものに等しく仏性が宿っているのだから、違いを超えて互いに敬い、互いに供養することの大切さを教えてくれます。この世はまさしく曼荼羅世界なのです。

自分勝手な先入観にもとづき「色めがね」でこの世を見て、自分と意見が違う、習慣が違うだけで、他を批判し けなしてはかえって自己の心の醜さを表すだけです。違いを超えて多様性の中に共通するものに目を向け尊重することが、自分を更に活かすことにつながり、心豊かに生きることになることでしょう。

合 掌

令和二年 庚子閏年 元旦

延命山正光寺 住職 高野隆晃